

アクア母ちゃん

厚岸漁協女性部長
神 玲子さん



いろいろな人に経験して欲しい

ここは、夫婦船が多く、女性も船に乗り、定置の網起こしをしています。浜から帰ると家事に育児、朝から晩まで働いて、みんな忙しくいるので活動といってもなかなかできないのが現状です。

ホッキが安いので何か作って付加価値を高めて売りたいねという話は出ても、希望だけで実行に移す時間的余裕はありません。

それでも、支部が15あるので地区交流会を行ったり、旅行の積立貯金をして総会で川湯温泉に出かけたり、3年に1度、道外旅行を実施したりはしています。

環境保全の運動も地道にですが行っています。植樹はもちろん、石けん使用の声掛けもしています。

支部長時代に九州のシャボン玉石けんの社長の講演を聞き、帰りにいただいた試供品を使ったところ、汚れの落ちもよく、洗いがりの柔らかさに感動して、それからずっとわたしはシャボン玉の粉石けんを使っています。環境に優しいということで町でも粉石けん購入の助成をするなど積極的に石けん使用の推進をしています。

部長になって2年目。つくづく思うのは、これからの女性部長に

は第1条件として、車の免許が必要だということですね。部長になると家の仕事の合間を縫って、会議などいろいろ出歩かなければなりませんので、免許のないわたしは苦労しています。

部長になったことで、ほかの地区の人と知り合いになれ、いろいろ皆さんのお世話になりました。この出会い、人との交流は貴重な自分の財産になっています。そういった意味では、部長の仕事は忙しくて大変ですが、交代している人々に経験して欲しいと思います。

あなたのレポーター The Aquaculture

育てる漁業

平成14年12月1日
NO.355

発行所 / 財団法人北海道栽培漁業振興公社
発行人 / 杉森 隆
〒060-0003 札幌市中央区北3条西7丁目
(北海道第二水産ビル4階)
TEL(011)271-7731 / FAX(011)271-1606
ホームページ <http://www.saibai.or.jp>



指導所見聞記

渡島南部地区は産れる魚種が多く、仕事も多い。岡玉事業が日白押し

～渡島南部地区～
所在地 鹿山町字中津73
担当理め 戸井・東井・日浦・尾野内
古武井・鹿山・横法華
スタッフ



イキイキ水産学園でサケの増養殖について小學生に教えているほか、マリンスクールで地引き網体験をしています。

乳おき被害を少なくするため、モニタリング調査を行い、乳おきが約1/3に減少した。これにより、水産物の品質も向上しています。

渡島南部地区は産れる魚種が多く、仕事も多い。岡玉事業が日白押し

独自に担当区内の漁業士会を立ち上げて年3回の例会で情報交換をしたり、アイデアを出し合っています。

コニアの乳おき症の原因究明のため、独自で環境調査を行い、水温・塩分のデータをとり、7月1日産報社(73)にデータを書き送っています。

後継者育成事業に力を入れている

産報社さんには、おみやげもたくさんあります。

産報社さんにもまきこんで、おみやげもたくさんあります。

産報社さんにもまきこんで、おみやげもたくさんあります。

渡島管内『もってけ即売会』

10月12日、函館市内の渡島支庁前庭で『渡島農林水産物・もってけ即売会』が開催され、渡島管内28漁協が参加しました。この即売会は、管内17市町村が渡島支庁の補助を受け、3年前から始めたもので、今年は1万人を超える人出でにぎわいました。

上磯産煮干しや知内産マコガレイ、長万部産黒ホッキなど多数の目玉商品が出品され、限定300袋の松前産活アワビは瞬く間に整理券の配付が完了、南茅部産秋サケには長蛇の列ができていました。

また、お昼には松前産ホッケのすり身を使った「新鮮おしま鍋」が無料で振る舞われました。

CONTENTS 目次

- 漁業士発アクアカルチャーロード 2
- 小樽市漁協指導漁業士 成田正夫さん
- 栽培公社発アクアカルチャーロード 3 ~ 5
- 沙流川のサクラマス放流について
- 栽培スポット 6
- 釧路管内水産種苗生産センター
- 快調! 『銀聖』プロジェクト 7
- 『育てる漁業研究会』開催のお知らせ 7
- アクア母ちゃん 厚岸漁協女性部長 8
- 指導所見聞記 渡島南部地区水産指導所 8

若者のやる気を 尊重しよう

小樽市漁協指導漁業士の成田正夫さんは、ウニ、アワビ、タコ箱、シャコ刺し網、小型定置網などの漁業を主に営んでいます。

成田さんは「シャコは昔に比べたら資源は減ってることは減ってるけど、何年に1回かは異常発生してるみたいだ。シャコがこれだけ獲れるのはここだけだから、大事にしたいよ」と話します。

シャコはふ化放流などの技術開発がされてないため、増養殖による資源添加はできません。

資源管理で守る

「試験場で年に二回底質調査をして、シャコの巣とか調べている。産卵期は獲ってないし、あとは目合の調整で資源管理してくしかないな」

現在、刺し網の目合の主流は2寸5分。最近では自主的に2寸7分に切り替える人もだんだん増えてきたそうです。

「昔、いろいろ目合を変えて1反ずつ刺してみても、網によって労働時間がどれくらい短縮されるか試験をやったことがある。目合を大きくすると小さいカレイもかからないから省力化になるし、カレイ資源の保護にもなる。いずれはみんな2寸7分になるんじゃないかな」

若い者にもっといろんなことをや

らせてやりたい。今の若い連中はおとなしすぎる。思ったこと、気づいたことは遠慮しないでどんどん言えばいいんだよと成田さん。

「今年寄りではみんな資源が豊かな時に漁師になってるから危機感がない。後継者がいなければなおさらだ。自分のかまどのことしか頭にない。だけど若い連中は違う。資源の少ない時に漁師になって、この先ずっとこの海で食べなきゃならない。真剣に海の将来を考えてるよ」

成田さんが若いころ、青年部でカキの養殖を始めることになり、指導所や市の水産課などを駆けずり回り、やっと補助を取り付け、いざ海中に吊るしたところ、施設の近くの定置網業者から魚が入るのを邪魔されるかもしれないとクレームが付き、中止させられた経験を持っています。

やらせて見守る

「失敗して笑われたっていいから、若いのがやりたいっていいでしたらやらせて見守るのがほんとにだる」

青年部ではハタハタのブリコを集めて増養殖の試験事業に取り組もうとしています。

「例えば、ハタハタを獲ってない人でもおれには関係ないって知らんふりしないで、もしもハタハタが来れば、自分たちだって網を刺すよ



小樽市漁協指導漁業士 成田 正夫さん

うになるんだから協力できることがあればやってやろうや」

あと10年もたてば、高齢者が引退し、漁業者の絶対数はぐんと少なくなります。

「地道に放流事業を続けて資源管理をしていけば、この海でも食っていける。自分で時間をやりくりできるし、気を使わなくてもいい。漁師は面白みのある商売だと思うよ」

もっと魚を食べて

成田さんが今、世間に向かって言いたいことは、もっと魚を食べてほしいということ。

「とにかく、今の子供は腹が弱すぎる。落ちたものでも拾って食うぐらいでないと免疫力は付かない。魚を食べれば、骨も丈夫になるし抵抗力も養われる。母親も自分で魚をさばいて、子供に新鮮なおいしい魚を食べさせてやらないと、子供も味がわからない。魚を食べる人がいるからこそ成り立つ商売だからね」

輸入魚のほうが手にしやすい今の流通システムにも問題がある。地元で獲れた魚が地元の人々の口に入らない。もっと地産地消を推進すべきだよと成田さんは訴えます。

沙流川のサクラマス放流について

はじめに

日高支庁管内を流れる沙流川は、サケマス資源増殖の基幹河川に位置づけられているとともに、シシャモの産卵遡上がおこなわれる川として知られており、いずれの魚種も、沙流川を自然再生産の場とする、地域の重要な水産資源であります。

サクラマスについては、サケマス類の中でも、天然産卵による生産に大きく依存することから、その資源水準は横ばい状態にあります。また、サクラマスは沿岸域で漁獲が可能なることから漁獲コストが安く、他のサケマス類の端境期に利用できることから、貴重な漁獲対象資源として、今後の資源増大が期待されております。

公社では、北海道開発局室蘭開発建設部沙流川ダム建設事業所の依頼により、平成13年度から平成18年度まで、沙流川総合開発事業に関わるサクラマス資源保全

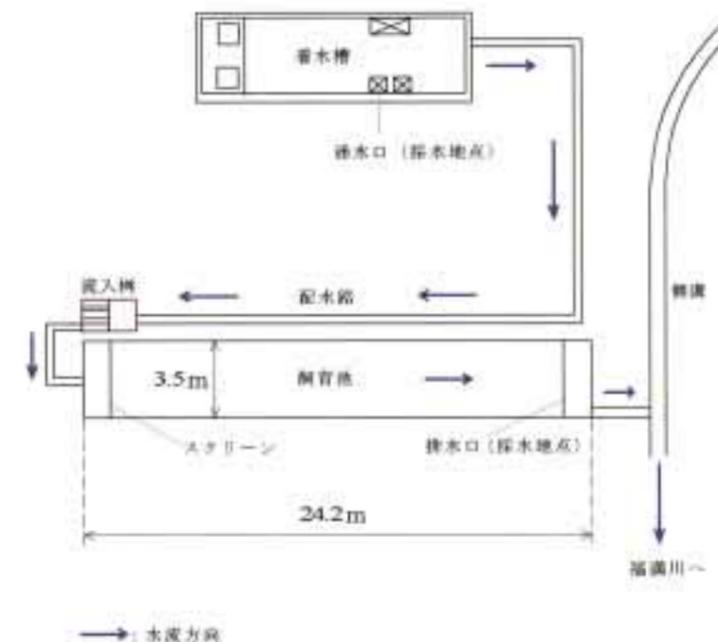


図1 サクラマス幼魚飼育池平面図

技術確立の一環として、門別町漁業協同組合が所有する、門別サケマスふ化場に設置された飼育池(幅3.5m、長さ24.2m、飼育水深0.6~0.8m、飼育容積50.8~67.8m³、図1、写真1、2)において、サクラマス幼魚の飼育管理、標識放流をサクラマス試験として

行なっております。今回は、平成13年度と平成14年度の試験実施状況について、ご紹介したいと思います。

試験概要について

基本的な試験工程は、河川遡上親魚より約13,100粒を採卵



写真1 サクラマス幼魚飼育池



写真2 飼育池内のサクラマス幼魚

し、その年の9月から2年後の4月まで20カ月間、飼育を行い約10,000尾を放流するものであります。

初年度にあたる平成13年度は、11月に平成13年度放流分としてサクラマス幼魚約11,500尾を購入し、飼育を行ないました。

平成14年度は、5月22日に平成13年度分の標識放流を実施しました（写真3、4）。6月には、今年度放流分として、新たにサクラマス幼魚約12,100尾を購入し、現在飼育を継続しております。10月には、サクラマス卵の収容、孵化技術習熟のため、サクラマス卵13,100粒を購入し、福満川サケマス孵化場の孵化水槽に収容しました。これは、平成15年度放流分となります。

平成15年度以降、平成18年度までは、飼育魚を4月～5月に標識放流を行い、9月に遡上親魚から採卵、孵化を経て、サクラマス幼魚の飼育管理を行なうこととなります。

試験方法

標識放流を行なうサクラマス幼魚については、全てスモルト（1年以上飼育した銀化型、写真5）で放流しています。これは、採卵孵化後の翌年春に放流する稚魚の平均沿岸漁獲率が0.53%に対して、スモルト放流が2.36%と高いことによります（北海道立水産孵化場,1998. 魚と水35）。

また、飼育魚のスモルト化率を高くするための飼育管理として、

月に1回、飼育魚50尾の体重、全長、尾叉長、体高の測定を行ない、平均体重からサクラマス幼魚成長曲線（出典：独立行政法人さけ・ます資源管理センター、図2、3）に適合するように、餌量をコントロールしております。あわせて、飼育池の長期水温観測、飼育用水の溶存酸素量や水素イオン濃度、栄養塩類など20項目についての水質調査を同時に行なっております。

試験結果

・スモルト化率

平成14年5月22日に平成13年度分のサクラマスの標識放流として、約10,000尾に標識が施され、福満川孵化場の水路から福満川へ放流されました。

放流時の平均体長は 13.3cm、平均体重は23.1g、スモルト化率は98.9%と高い値を示しました。

・標識魚の再捕状況

標識魚の再捕については、平成14年11月現在で見ますと、平成



写真3 標識作業状況



写真4 標識魚の放流



写真5 サクラマススモルト標識魚

14年8月29日、十勝管内広尾町沿岸にて、福満川孵化場標識魚であることを示す、SKと標記されたピンクリボンタグを付けたサクラマス1尾（尾叉長29.5cm、体重463g）が捕獲されたのを初め、えりも町、白糠町、別海町沿岸で各1尾、計4尾の再捕が報告され

ています。

・サクラマス幼魚の成長

平成13年度放流分のサクラマス幼魚は平成13年11月より飼育が開始され、放流された平成14年5月までの7カ月間、飼育管理が行なわれました。この間の12月から3月まではサクラマス幼魚の越冬期にあたり、また、水温も低下するために、サクラマス幼魚の摂餌活動が鈍くなり、成長曲線をやや下回る結果となりました。4月以降、放流が行なわれた5月までは、水温の上昇に伴い摂餌活動が活発になり、成長曲線を上回る成長を示したものと考えられます（図2）。

平成14年度放流分として、平成14年6月に導入されたサクラマス幼魚の成長をグラフでみてみると、6月の飼育池導入当初から成長曲線の体重を上回っていったので、1カ月毎に成長曲線から餌量の補正を行なった結果、9月以降は成長曲線が示す体重と大きくずれることなく、ほぼ曲線に仕上がった成長がみられるようになりました（図3）。

成長曲線に従わない成長を続けた場合、降海せずに河川残留型（いわゆるヤマベ）になる可能性があるため、月毎の餌量の補正は重要であると考えられます。

おわりに

沙流川のサクラマス資源の維持は、現在、自然にゆだねられておりますが、将来、何らかの原因で資源の減少が見られた場合の対応

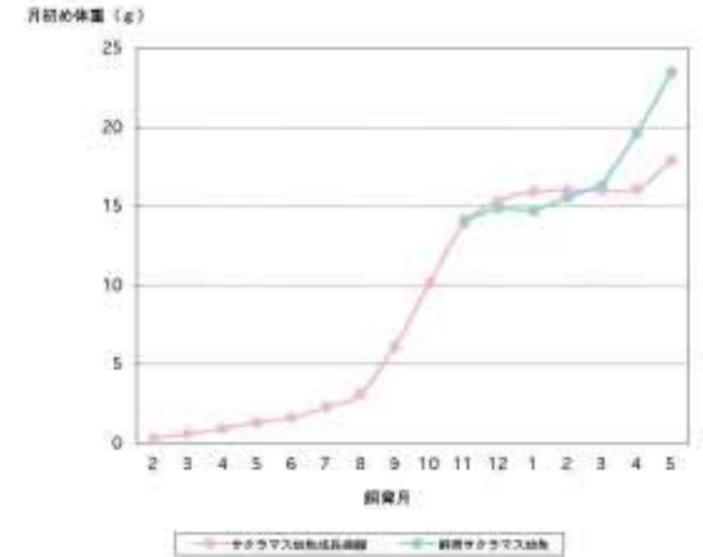


図2 飼育サクラマス成長曲線（平成13年度放流魚）

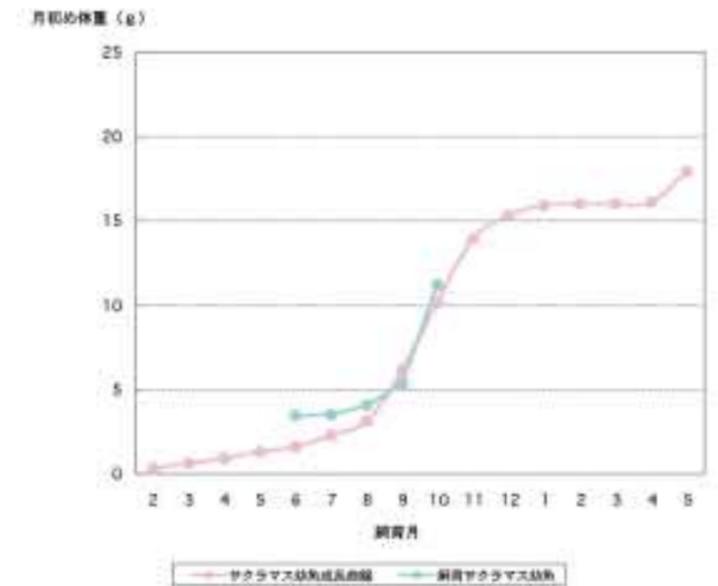


図3 飼育サクラマス成長曲線（平成14年度放流魚）

策として、サクラマス人工孵化放流事業の確立は、重要であると考えられます。その意味で、沙流川におけるサクラマスの人工孵化放流について、平成13年から18年までの6年間における、一連の放流事業に関するデータの蓄積は、将来のサクラマス資源維持に寄与

するところが大きいものと考えております。

平成15年9月には、平成13年度標識放流分のサクラマスが、親魚として遡上が期待され、どれだけの親魚が回帰するのか、非常に楽しみです。

（調査設計第二部 藤井 真）



釧路管内水産種苗生産センター訪問

釧路管内水産種苗生産センターは、エゾパフンウニの種苗生産施設として平成6年に厚岸町筑紫恋に建設されました。

運営母体は釧路管内7漁協（白糠・釧路市・釧路市東部・昆布森・厚岸・散布・浜中）と1市4町（白糠町・釧路市・釧路町・厚岸町・浜中町）で構成される運営委員会で、管理組合である厚岸漁協が種苗生産事業を担い、漁協職員3人と臨時職員2人、パート4人で管理しています。種苗生産に要する費用は受益者となる各漁協がそれぞれの種苗配分割合に応じて分担しあっています。

道内一広い育成室

施設は鉄骨造平家建で、敷地面積は3,753㎡と道内一の広さを誇っています。

水槽は地元の造船所に発注して作ったもので、育成室には10×1.5×0.5mの7.5t型FRP水槽が79槽設置され、屋外に同型8槽と4.5t型12槽が設置されています。



餌のコンプに群がる稚ウニ

年間の種苗生産計画は5mm種苗500万粒で、オープン当初から順調に計画を達成しており、平成14年度では5mm以上が500万粒、規格以下も合わせると約800万粒の生産実績となっています。

種苗生産は春採苗のワンサイクルで、12月に潜水で漁獲された厚岸産の親ウニを600～800個ほど確保し、水槽2槽を使い蓄養して徐々に水温を上げていき、4月に2～3回採苗します。

幼生沈着後は、11月の出荷まで波板で飼育します。

水槽1槽につき840枚の波板を収容し、1槽あたり12～13万粒の稚ウニを飼育しています。

アワビモは8槽の水槽を使って種板をつくった後、2月から培養を始め、採苗までに6万枚強のアワビモ波板を培養します。

稚ウニの成長に合わせ、餌はアナアオサとコンブを与えています。アナアオサは根室産のアナアオサを屋外の水槽で培養し、コンブは地元の漁業者からの提供を受けています。ワンシーズンでアナアオサ約1t、コンブ約20tを使います。

選別をしないで出荷を

同センターでは当初、剥離選別して出荷していましたが、平成12年から選別をやめ、水槽ごとに大小込みで各漁協へ配付しています。

三上敬市所長は「いじればそれだけ種苗は痛んでしまいます。海中への放流後、漁獲に結びつけるためにできるだけいい種苗にして渡したいという思いから選別をせずに出荷することにしました」と話します。



三上敬市所長

飼育時なるべく種苗に触らないように注意して、水槽の底掃除も工夫して行っています。

取水量は1時間に320t。取水口は沖合約440mの位置にあり、センターまでの取水管の長さはおよそ700mで、干満の差で自然に海水が入ってくるシステムを取り入れているため、時化るとろ過器が詰まってしまう。

「ろ過器が詰まると自動通報装置で夜中でもすぐ分かるので、センターに出てきて、逆洗をかけなければなりません。水槽への給水を止めなくてもいいように500tの貯水槽を設備していますが、一番苦労するのは水の確保ですね。生きものに合わせて管理しなければならぬので、9年経っても大変さは変わりません」

快調!『銀聖』プロジェクト

『銀聖』は、日高産銀毛サケのブランド名です。

日高定置漁業者組合が日高産銀毛サケを差別化しようと平成12年秋、公募して決定した名前です。

ネーミング募集には全国から1万4千通もの応募がありました。

銀聖プロジェクト委員会の佐藤勝委員長は「応募の数を見て、この事業はいけると確信した。これはうまいサケを食べたいという消費者の意思表示だと思った」と話します。

ネーミングと同時にキャラクターの募集も行いましたが、名前とキャラクターの選定には、印象強く親しみやすいものをと、小学校や老人ホームを回って幅広く意見を聞いて絞り込み、審査委員会で『銀聖』に決定しました。

イベントで宣伝を

昨年は、まず名前を覚えてもらおうと、ポスターやチラシを作り、銀聖の魚を持ってプロジェクト委員が全国各地のイベントに出か

け、あちこちで実際に食べてもらい、マスコミにも働きかけるなど、宣伝活動に精を出しました。

『銀聖』の名は、銀毛サケの王様として日高定置漁業者組合がよりすぐって認証した3.5キログラム以上の婚姻色のない銀一色に輝いているものにだけ与えられます。

認証シールに通し番号

『銀聖』は、『銀聖』指定加工場（7社）のみの取り扱いで、偽物防止も含め、品質管理に手落ちがないよう、取扱業者が分かるように通し番号が入った認証シールが貼られています。

昨年は三越にその品質の良さを認められ、各地の三越で取り扱われました。

テレビにも取り上げられ、今年に入って知名度はぐんとアップし、バイヤーからの問い合わせも相次ぐようになりました。

日高管内は10協ありますが、単協ごとに選別の仕方や入札方法が違うので、統一ブランドとして



銀聖認証シール

漁協の枠を越えた生産者段階での共通意識が必要になってきます。さらに、3.5キロ以下の銀毛の取り扱いをどうするかなど規格基準整備が今後の課題です。

食文化を考える

佐藤委員長は「人を良くすると書いて食になる。思考力、忍耐力、行動力、力の基本は食べ物にある。子供たちに安全な良いものを食べさせたい。本物が分かる人間になってほしい。『銀聖』プロジェクトは単なるサケのブランド化ではなく、食文化を考え直し、語るきっかけになればという願いで始めた」と話しています。

平成14年度『育てる漁業研究会』を1月24日に開催!

低迷しているウニ、アワビなどの磯根資源をいかに増やすかを皆で考え、その解決策を探る論議の場として、今年度の「育てる漁業研究会」を、北海道立水産試験場と共催で、下記のとおり開催いたします。

皆様方には、ふるってご参加下さいますようお願い申し上げます。

テーマ：磯根資源の増殖を今一度考える

日時：平成15年1月24日（金曜日）午前9：30～12：30

場所：札幌市 第二水産ビル 8階 大会議室